



【第11回】

contents

[コラム]	[解説]	[解説]	[解説]	[特別コラム]
情報教育をめぐって …児玉公信	情報倫理ビデオの目指したもの …中村 純	eラーニングと教育の相互関係 …高岡詠子	アルゴリズム体験ゲーム「アルゴロジック」 …大山 裕	お大師様を訪ねて (2) 菊と刀 …湖東俊彦

応 一般 Column

情報教育をめぐって： 「苅宿実践」と「近藤実践」の意味すること



「情報教育」とか「教育のデジタル化」という言葉を聞くたびに、筆者は「苅宿実践」と「近藤実践」を思い出す。ご存じの方もおられようが、簡単に紹介しよう。

「苅宿実践」は、1992年度に空洞化の進む東京都心のある小学校で行われた苅宿俊文氏の教育実践だ^{1), 2)}。苅宿学級は6年生22名のクラス。生徒一人ひとりにノートブックPCが配布され、教室にはデスクトップPCが数台、スキャナやビデオカメラなどの機器が配備された。教師は、必要最小限の操作方法を示して、あとは自分たちが使い方を見つけていった。

授業のテーマは、1学期が「(何かになったつもりで) 見つめる」、2学期が「(こだわりの地図を通して) 自分を見つめる」、3学期が「(主人公である) 自分を通して見つめる」であった。そこで、ある生徒は黒板になったつもりで板書を裏文字にした絵を描いたり、ほかの生徒は猫になって塀の上を飛び回るビデオ映像を作ったり、地域の人たちと交流しながら自分の地図を作ったりすることを通して、それまでは影に隠れていた子どもも、最後には自分の成果を父兄の前で堂々とプレゼンするようになった。こう書くと、子どもたちが情報機器を縦横に使えるようになったことが成果であるように見えるかもしれないが、そうではない。その1年は自己発見の旅であり、情報機器はその触媒に過ぎなかった。その成果は、かつては「みんなの論理」に埋もれていた子どもたち一人ひとりが、自分自身の価値を認めるようになったことだ。

「近藤実践」は、1995年に長崎県佐世保市の中学校で行われた国語科の近藤真氏の教育実践である³⁾。一人ひとりにフロッピーディスクを持たせて、そこに1年間の自分の作品を書きためていく。授業では、書き上げた作文を推敲ツールに入れて、さらに文章を改善する。そのうちに、ある生徒は詩集を発行し、仲間と大人の文学賞に応募して入選するほど自己表現力を高めていく。

さまざまな授業が行われたが、その中でも筆者が最も印象的だったのは「私はあなたが選んだ歌が好き」という授業だ。まず、教科書に出てくる短歌や俳句、それぞれ500首と440句を、あらかじめ、作品、読み方、作者、表現技法、季節、主題などの索引を付けてカード型データベースに入れておく。生徒は、この中から自分が愛を感じる歌をあれこれ検索し、その中から今の自分の気持ちにぴったりと感じた1つを選んで、その魅力をほかの人たちに伝える感

想文をきっかり 210 字に書く。この感想文も、データベースに書き加えて検索できるようにしておく。それをほかの生徒が読んで、感想文の作者に、共感のメッセージを送るといったものだ。どうだろう、自分がいいと感じた気持ちに共感してもらえる喜びは。

20 年も前の教育実践だが、今から見ても非常に魅力的と感じる。ともに、生徒一人ひとりが、作品の作り手として生き生きと輝いているではないか。ここではコンピュータが「学びの文脈を拡大」しているのだ。

さて、2011 年の全国大会の際に情報処理教育の一連のシンポジウムで、「初等中等教育でプログラミングを教えるべきか」という趣旨の討論のパネリストを仰せつかったので、現在はある大学で教鞭を執られている苧宿さんに、無理を言って時間をいただき、お話を伺った。筆者のパネル討論での立場は、初等中等教育なら、情報機器は学びの道具として使うべきというもので、それを補強しようという魂胆からだ。

そこで、20 年来の疑問「果たしてあの実践はよかったのか」をぶっつけてみた。答えは「分からない。その生徒がそれ以降に受けた教育や環境の影響のほうが大きいから」。確かに、ほかの先生も、あのような形ではなくとも、自分なりの工夫をして、生徒が自分の価値を見いだす教育をしていたらう。

そして「初等中等教育でプログラミングを教えるべきか」とも聞いてみた。苧宿さん曰く、教えるなら教えてもいいが、理解するための仕組みを設計してはどうかと。情報処理学会は横断的な学問をやっている。算数、理科、社会、国語の先生たちと連帯して、「教え込む」授業ではなく、「学び」のための合科の授業として取り入れられるようなコンテンツと運営の仕組みを用意すべきだ。学会はそのように世論を動かせと諭された。

さらに曰く、団塊の世代の先生たちが定年で辞めていき、若い先生が多くなった。彼らは職業として教師を選択した人たちだ。最初のうちは明確な動機を持っている。だが徐々に屈折していく。彼らを支援してあげたい。情報処理学会はそれに協力してほしい。小学校の先生の話少しでも聞きに行ってもらいたい。

ちなみに、苧宿さんはこのところ学びのための「ワークショップデザイン」を中心にお仕事をされている。近藤さんは中学校の校長をしておられるが、担任に協力してもらって、まだ授業をしておられるようだ⁴⁾。俳句や連歌を通しての自己表出の授業。生徒の輝きに教師が気づいて、気持ちを添える感じの授業を。あの、データベースを使った授業は、こうした一連の授業のごく一部でしかなかったのだと気づかされる。

参考文献

- 1) 佐伯 胖, 佐藤 学, 苧宿俊文: 教室にやってきた未来, NHK 出版(1993).
- 2) 苧宿俊文: 子供・コンピュータ・未来, ジャストシステム(1997).
- 3) 近藤 真: コンピュータ綴り方教室, 太郎次郎社(1996).
- 4) 近藤 真: 中学生のことばの授業, 太郎次郎社エディタス(2010).

児玉公信 (情報システム総研)